

# 04

宮城県  
気仙沼市

## 鹿折まちづくり協議会

# 復興はこの手で！住民主体のまちづくり協議会

津波で非常に大きな被害を受けた気仙沼市鹿折地区で、住民によって設立された「鹿折まちづくり協議会」。一旦は衰退しそうになったものの若手の加入によって盛り返し、地域の復興にとどまらず、夏祭りの開催や中学校での「ふるさと学習」など活発な活動を続けている。

### 取組のPOINT

ヒト 動ける人間で団体設立

着眼点 自分たちでの復興を考える

連携・協働 行政とスムーズな連携

持続性 復興の先へ

### DATA

取組主体 鹿折まちづくり協議会

取組内容 地域の復興とまちづくり

人物紹介 会長  
熊谷 英明 (くまがい ひであき)



気仙沼市出身。水産関係資材会社に勤務。震災前から、鹿折スポーツ振興協会役員を務めるなど地域づくりに関心があった。震災直後は勤め先の業務が多忙を極めていたが2014年に入会、2019年から現職。

## ヒト 動ける人間で団体設立

### 民間から生まれた動き

気仙沼市鹿折地区には、もともと鹿折地区振興協議会（地区振協）や、その下部団体にあたる鹿折地区自治会長連絡協議会があり、まちづくりや地元発展のための活動を行っていた。ところが、東日本大震災の津波で地区一帯が被害を受けたことで会員らが散り散りになり、完全に機能を失った。

住民の舵取り役が不在となる中、最初に動いたのは当時の鹿折公民館長・小野寺優一さんだった。まだ街の中にがれきが多く残り、住民が避難所暮らしを強いられていた2011年8月頃、小野寺さんは「鹿折の復興のために何かしよう。動ける人間で団体を作ろう」と仲間へ声を掛け始めた。そのうちの一人が、当時、鶴ヶ浦自治会長だった小松洋一さんだった。震災当日、仕事で内陸側にいた小松さんは津波に遭いすぐに地元へ戻れず、「あのとき何もできなかった、という負い目のような感情がありました。だから地元のためにできることは何でもやる、という気持ちでした」と振り返る。

### 市長に提言書を提出

キーパーソンの2人は熱い気持ちで活動を始めようとしていたが、気仙沼の被災規模はあまりにも甚大だった。ようやく人を集め、念願の「鹿折まちづくり協議会（まち協）」を旗揚げしたのは、1年以上先の2012年10月だ。役員として地区内の自治会長ら20人が参加し、小松さんは事務局長に就いた。コンセプトは「行政主導ではなく、住民参加を取り入れる復興」。住民主体で運営するまちづくり協議会の発足は、気仙沼市で初めてのことであった。

当初協力してくれたのは、NPO法人神戸まちづくり研究所の理事長・野崎隆一（のざき りゅういち）氏だ。コンサルタントとして阪神淡路大震災の復興に取り組んだ経験を生かして的確な助言と支援を行い、住民と行政のパイプ役を買って出た。また、近畿大学（大阪）、宮城大学、工学院大学（東京）の3大学の教員と学生が足繁く通い、土地区画整理等に関するランドデザイン作成を支援した。仮設住宅集会所等で定期的に「まちづくりサロン」を開いて中学生も含む住民の声



津波で大きな被害を受けた鹿折地区

を集め、2014年3月市長あてに「鹿折地区のグランドデザイン策定における提言書」を提出した。

## 着眼点 自分たちでの復興を考える

### このままでは空中分解だ

ところが、活動は失速しはじめる。自治会長らを集めて発足したチームだったが、次第に意欲を失い会議も欠席者が増えた。2014年夏ごろ、小松さんは「このままでは空中分解だ」と悲壮な思いで、「とにかく参加してほしい」と会員に必死に訴えた。これを聞いた市議会議員の一人が駆け込んだのが、現会長・熊谷英明さんのもとだった。「大変なことになってるぞ。若手の力が必要だ、参加して事務局長の小松さんを手伝ってくれ」。熊谷さんは、震災直後は本業の復旧復興に忙しく手が回らなかったものの、まち協の活動に関心を抱いていた。「それなら」と、同年代の仲間数人とともに合流した（熊谷さんは2019年に会長就任）。他にも同様の動きがあり、会の構成メンバーは60～70代中心から30～50代中心へと若返った。

### 住民の声を形にする

まち協は役員と構成員で構成される。構成員は毎週火曜に会合を開くが、熊谷さんが入会した時期から急激に活気を増した。自治会や行政、復興整備事業者であるUR都市機構との意見交換も活発に行い、住民の声を直接届けた。次代を担う

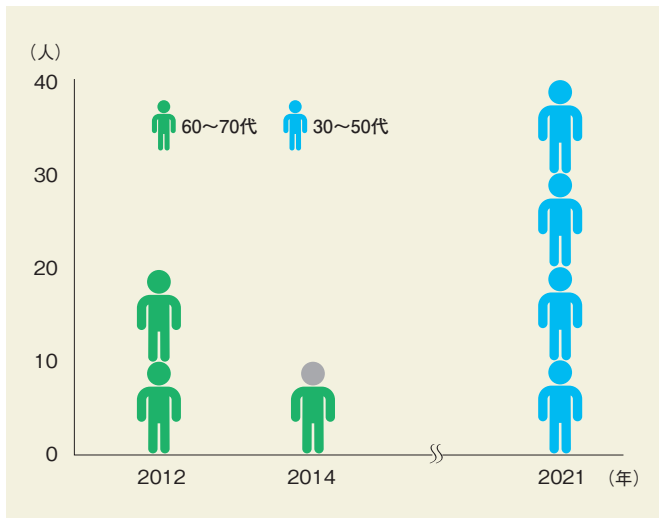
中学生世代の意見も聞き、そのアイデアは実際の公園設計や街路樹植栽計画に生かされた。

災害に強いまちづくりの一環で、従来行政主導で行われていた避難所運営を、住民と行政の協働で行いたいと意思決定。2020年に市長へ要望を行い、採用されている。避難所運営を主体的に行うことは住民の負担が大きいが、熊谷さんは「誰も反対しなかった」と話す。「役所から2、3人だけが来てくれるより、地元の地理も住民の事情も知ってる人間がみんなの手分けしたほうがいいに決まってっぺ」。何でも行政頼みにせず、自分たちでやる。これは昔から鹿折に根付く精神だと熊谷さんという。

もう一つ大きな出来事は、夏祭りの復活だ。震災前に毎年開かれていた「かもめまつり」は、震災後一度だけ復活したものの続かなかった。構成員から「やろう」という声が上がリ、まち協から地区振協などの団体、企業、学校等へ働きかけて実行委員会を組織し、2016年8月11日に鹿折復興盆踊りを開催。遠方に暮らす元住民にも喜ばれて1300人以上を集客し、伝統の大綱引きも行った。以来毎年実施している。



## ■メンバーの人数と年齢の変化



まち協メンバーの一員 星 修さん (写真左) と  
設立に携わった小松洋一さん (写真右)、中央は熊谷会長

連携・  
協働

## 行政とスムーズな連携

### 復興庁へ直談判で事務員確保

協議会発足当時の事務局は、復興支援に来ていた近畿大学の学生だった。翌2013年春、この学生が地元へ戻り新たな人材が必要となったとき、小松さんらが頼ったのは気仙沼に支所があった復興庁だ。報酬の支払いもできない状態だったが、話を聞いた当時の所長はすぐに手配し、三浦千草 (旧姓丹澤) さんを派遣してくれたという。三浦さんは2013年度から2年間復興庁からの出向の扱いで事務局を務め、その後1年はまち協が宮城県補助金を活用して雇用した。その間、被災者向けサロンの開催や補助金申請事務など「まさに八面六臂の働きぶりだった」と、小松さんと熊谷さんは感謝する。

震災直後は全国各地から数多くの支援団体が気仙沼に入り、活動を行った。「その中で、神戸まちづくり研究所や、3つの大学と出会えたことは大変ありがたかった」と熊谷さん。「現在のまちづくりは、彼らにリードしてもらったことが生きている」。



「鹿折まちづくりサロン」で開かれた会合の様子

### 行政や地域と幅広い連携

まち協の特長の一つは、行政との協働が自然でスムーズに進んでいることである。構成員の中には行政職員もいて、毎週の会合には必ず私人として出席する。熊谷さんは「彼らのことは『行政に詳しい一市民』だと思ってる」と冗談めかして言うが、実際、地域の生の議論に日常的に参加する行政職員がいることは心強い。また会合には、構成員ではない行政職員も呼ばれることがあるという。「回答がほしいのではない、一緒に考えてほしい」「『できない』ではなく『どうしたらできるか』教えてほしい」熊谷さんらは何度もそう伝え、コミュニケーションを深めている。

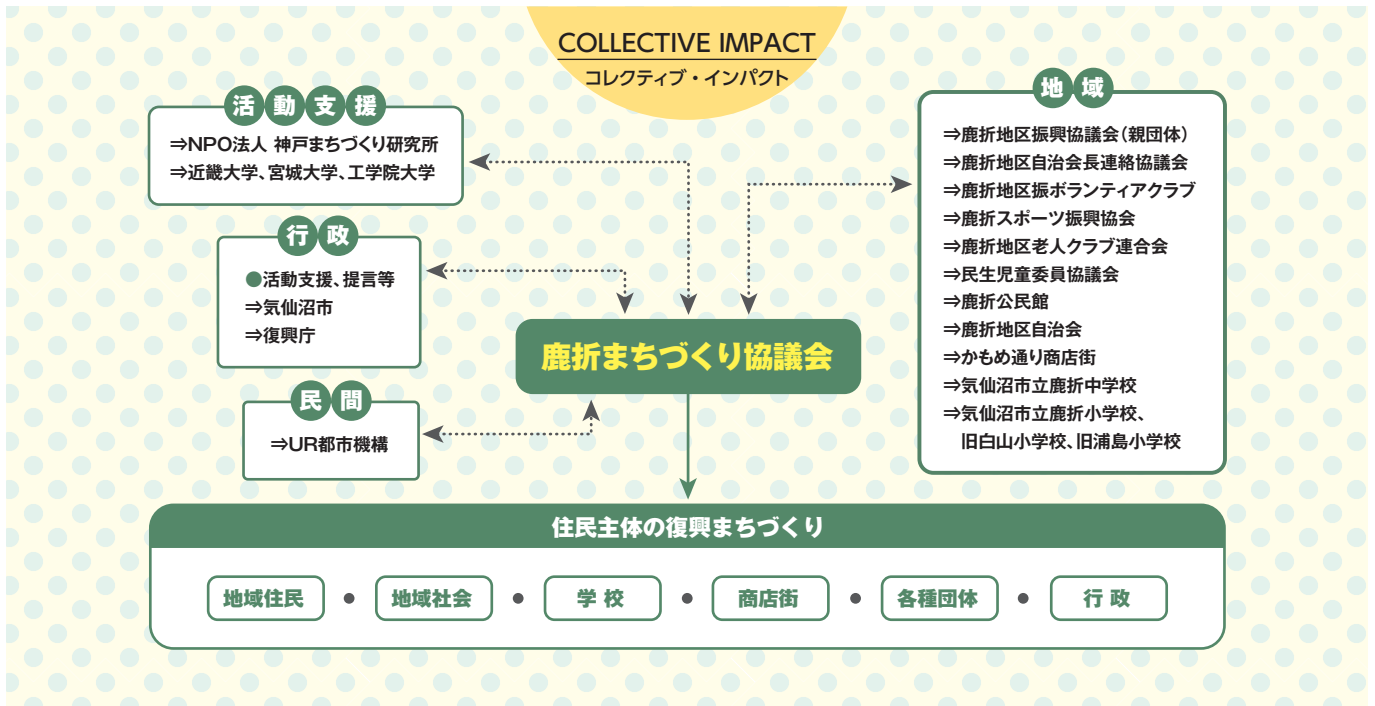
構成員は本業があったり、自治会長として地域事情に明るかったりと、それぞれがネットワークを持っている。そのため、活動にあたって幅広く協力を得ることができ、自然に地域と協働できると考えられる。

地区に1校ある中学校との関わりも深い。まちづくりへ意見を出してもらうのはもちろん、避難所運営訓練も共同で定期的実施する。2016年からは総合学習の「ふるさと学習」の一環としてまち協が講話をしている (2020、21年は新型コロナウイルスの影響で中止)。中学生にとって地域を良くしようと活動する大人を身近に感じることは刺激になっており、文化祭でまち協を題材にした劇を上演したり、「まち協に入りたいです」と話す生徒もいるという。

## 持続性 復興の先へ

### 復興に年月を要した気仙沼

市街地に大型漁船が打ち上げられるなど、中心部にも津波の被害が及んだ気仙沼市は、復興に年月を要した。熊谷さんは、復興公営住宅が完成し、その敷地で復興盆踊りを開催し



2016年8月11日に開催された「鹿折復興盆踊り」

た2018年頃になって、ようやく復興を実感できたという。鹿折地区のまちづくりはまだまだできあがっておらず「計画の7割くらいかな」と話す。

まち協の活動は復興のランドデザイン策定から、災害に強いまちづくりや地域の発展のデザインへとシフトしている。幸い役員も構成員も、積極的で熱心なメンバーが集まっており、行政や地域との協働もスムーズだ。復興を成し遂げるまで期間限定の活動ではなく、復興の先にある鹿折の未来へつなげる活動を意識している。

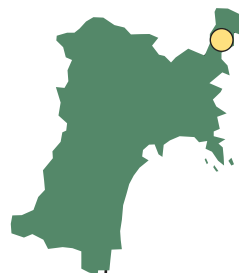
### 産業の復興と次世代への継承

若い人材の流出は今もなお深刻な課題だ。しかし主要産業である水産加工業は復活しており、震災前にはなかった輸出も視野に各社が事業拡大を模索している。かつて「きつい、汚い、危険」と敬遠された業界だが、現在はそのイメー

ジも払拭されている。まち協も地元産業を盛り上げるべく、2018年ごろから水産加工業について小学生向けに積極的にPRを行っているという。「暮らしやすいまちづくり、災害に強いまちづくりと同様に、地元産業の魅力を次世代に伝えることはわれわれの大切な役割」と熊谷さんは話す。鹿折まちづくり協議会は、行政や各種団体、学校、地元企業、商店街などと力を合わせ、これからも地元の発展のために力を尽くす。



鹿折中学校で行われた防災訓練



### 本事業例の問い合わせ先

#### 鹿折まちづくり協議会

宮城県気仙沼市西八幡前50-3

E-mail : jf7i01@gmail.com

HP : <https://www.kesenuma.miyagi.jp/sec/s025/20190911160316.html>

鹿折地区について語り合える会を毎週定期的で開催し、課題を提言書として市に提出。「安全快適で活力にあふれる楽しく住みよいまちづくり」を目指し、活動している。